

日本キリスト教会大阪北教会

2017年3月26日 礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書17章20節～26節

17:20 また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。17:21 父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。17:22 あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。17:23 わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。17:24 父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。17:25 正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っており、この人々はあなたがわたしを遣わされたことを知っています。17:26 わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます。わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内になるようになるためです。」

説教『すべての人を一つにしてください』

私たちはヨハネによる福音書1節から読み進んでまいりましてこの

・イエスさまの最後の晩餐におけるお祈りのところを、17節、そこを4回にわたって読んでまいりました。以前このヨハネによる福音書は大祭司イエス様の祈り、大祭司の祈りということで。私は今回改めて17章を読んでまいりました。聖書を読む、聖書が語っていることを理解するというのが至難のことだと感じながら読んでまいりました。理解することができたとして。イエス様が私たちに求めておられることに従いきるということはお一層難しいことだと思います。先週は子どもたち「インガールズ」というグループのこと、今日はマナちゃんカナちゃんも来ています。よく知っていますね。イエスさまが弟子たちを招かれたときに言われた「わたしに従ってきなさい」という言葉だよ。」と言ったら子どもたち、ふーん、という顔していた。ですからわたしたちは、イエス様のおっしゃることは、それなりに理解できたとして、このイエス様の求めに従おう。生きる。ということはほとんどパスしてこれまで過ごして来たのではないのでしょうか。17章におけるイエス様のお祈りは以下の3つに分けられるということは、この前申してきました。1節から5節まではイエス様ご自身のための祈り。6節から19節は弟子たちのための祈り。そして今日のところも含む20節から26節は弟子たちによって信仰へと導かれる。・者のための祈り。そしてそれは内容的にはこの世のすべての人に対する祈りもあり、それはイエス様が繰り返しておっしゃっていますが、「神よ、主よ、あなたとわたしが一つであるように。この世のすべての人を一つにしてください」。

こういうお祈りをイエス様は求めておられます。21節に「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。人々がイエス様を信じるようになるかどうかは弟子たちが、教会のメンバーが本当にイエス様と神様が一つであるように、一つになるかどうかにかかっているということです。22節「あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしたちが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを世がしるようになります。」このように祈っておられます。主イエス・キリストと神様が一つであられるように、世の人々が一つになることを切願しておられるのであります。ここでイエス様が描いておられる教会の、そしてまた人々の、こうあってほしい、なってほしいイメージがまるで違うわけです。父なる神様とイエス様が完全に一つであられるように。最高度の一体性、を祈り求めておられるのであります。この17章を読み進んでまいりまして何と驚くべきお祈りであろうか。これは正にイエス様ご自身の、人生の総括のお祈りだなあーわたしたちは毎年のように十字架上の7言。七つの言葉ですね。ヨハネ伝にも3つルカ伝にも3つあります。マタイとマルコは共通で1つ。合わせて7つですけれども十字架上の御言葉であり御命ですからそれ1人断片的なのですね。そこではイエスさまはもう一言のお祈りの説明なんてしている場ではありません。そんなことできるほど十字架刑は楽なものでありません。ですからわたしたちはその前後関係から、聖書全体から十字架上の7言にずーっと込められた思いと言うものをさぐるわけでありまして。けれども私は十字架上の7言はイエス様の地上における最後の御言葉の中から、それが尊いのは言うまでもないことでもありますけれども、このヨハネによる福音書の17章は正に十字架上の7言も含めてイエス様の生涯総括のお呼びだなあと、そういうふう徐々に、徐々に思うようになってきました。人生如何に生きるか。もう一つは、人生如何に泳ぐか。如何に死ぬか。というのはだんだん年を経て、高齢になり、老年になってきたら、厭が上にも・・・の中には死の試練において、生誕を通してあずかるイエス様の体と血、それにあずかることによってやがて御国においてあずかるさいわいを、今、覚えさせてくださる。そういう歌詞なのです。そういう死の試練を免れる人は1人たりともありません。どのように死ぬのか、わたしたちはこれからどういうことで生きてだんだん終わりが近づいて日に日にどのように生きて、どのように死ぬのか、それは毎日考えないでは済まされない課題であります。で、イエス様のお祈りの中に、イエス様のそれこそ人生の総括とも思える言葉が4節にあります。「わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。このように言うておられます。「あなたから託された業を成し遂げました。そしてあなたの栄光を現わしました。」そのようにここで言うておられます。それでわたしたちの生活、わたしたちの日常、それらが本当に神様のご栄光を現わすものになっているでしょうか。イエス様は「わたしに従って来なさい」とおっしゃるわけです。イエス様が

神様から託された業を成し遂げて。神様の栄光を現わされたのなら、それに信じ従う者を通して神様の栄光が現われないとすれば、わたしたちはイエス様を本当に信じて、従ってもいない証拠になります。すでに読んできたところの13章34節「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したようにあなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを皆が知るようになる」。先週連絡をこのまれた高山右近の立腹式を大阪城ホールで行われたことに触れました。その時その前に立腹されたマザー・テレサさんにも触れました。マザー・テレサはその時すでに聖人になっていたそうです。ルター派の牧師で神学者と言えば1945年4月9日にヒトラーによって処刑されたのが39歳。そのボンフェファーが獄中で書いたものが本になって出ていますね。彼は自分の信仰、人生をこういうふうに表示しました。「神の前に、神と共に、神なしで生きる。」こういうふうにはボンフェファーは書き残しました。「神と共に神なしで生きる」このボンフェファーの言葉を理解するのは私にとってひとつの課題であります。「神の前に」は分かりますね。「神と共に」も分かりますね。「神なしで生きる」これはまえの2つの言葉と一つなんです。正に「神なしで生きる」17章17節から読みます。「真理によって彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は」真理です。わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。」とあります。十字架上の7言にマタイ、マルコが記すのは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」。マタイ、マルコが記す十字架上の言葉はこれだけなのです。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」。これが内外で批判されるわけです。十字架にかかってこんな情けないことを言うような者がどうして人を救うことができますか」。生前はよかったかもしれませぬ。最後、こんな死に方。情けない叫びをあげて。死んだ者がどうして世の、世界の、救い主たり得ますか。けれども、これが神様の御心だったのです。もちろん、神様はもう死ぬはずの者に奇跡を起こしてくださいませぬ。イエス様も奇跡を起こされました。けれども、そしてイエス様と一緒に十字架にかかった「お前が救い主なら十字架から下りてみよ。そして我れ我れも救え」と最後まで叫んだ。まさに、「神なしで生きる」というのは、神の御心に従って、自らをささげ尽くす生き方のことでもあります。神の助けなしに、つまり、死の試練、それこそ、なな番ぼうの奇跡」という映画。監獄のこと。7番房？韓国の映画らしい。日曜学校の子供が「先生！これ絶対みてよ！」と言った。冤罪？観たら10人が10人も泣くンやで、センセイ」。正に罪のない人が、罪のある者の身代わりになって、神の助けなしに、こういうふうには生き、死ぬこと。これをボンフェファーは「神の前に、神と共に、神なしで生きる。」こういうふうには彼は表現してまさに神様への信従。イエス様を信じ、イエス様に従う。彼はそれを誠実に生きて死にました。そしてその同じ獄中でしたためたものの中に彼はこういう言葉も残しています。「教会は他者の為存在する時にのみ教会である、」先に繰り返し紹介した言葉と合わせて読むなら、「教会は他者ということになりますね。他者の為には生き、死ぬ時にのみ教会である。」それで私はボンフェファーのことは常々念頭に有る先達ですけれども、

パウロ彼の残した言葉はイエス様を理解し数々の言葉を残してくれています。それは単なる解説ではなくてボンフェツファの遺言だと思ふようになりました。そういう言葉なのです。本当に存在がかかっていることを読ませます。使徒パウロはこういう言葉をロマ書 1 4 章 7 節以下で記しています。「わたしたちのなかには、誰 1 人自分のために生きる人はなく、誰 1 人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは生きるすれば主のために生き、死ぬすれば主のために死ぬのです。」従つて生きるにしても死ぬにしてもわたしたちは主のものです。」本当にパウロはイエスさまとの一体性を告白していると思います、ただ主のために生き、主のために死ぬことのできるのは、正に主イエスとわたし自身が今も常にとこしえに。そして神の助けなしに生きるとしても、わたしは主の者である。十字架のキリストの者であり、そしてよみがえられたイエス様のものである。これはもう何ものもわたしから奪うことができない。そういうことを彼は経験しているのです。それで礼拝が終わってからまた聖書の箇所を読んで、ロマ書の 8 章 3 8 節以下、「わたしは確信しています。死も。命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも。他のどんな被造物も、すことはできないのです。」 9 章 1 節から「わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り。偽りは言わな。わたしの良心も聖霊によって証していることですが、わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたしの身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。(9 章につながる)。このパウロもキリストにつまずいた人です。そのために多くのクリスチャンが命を落としました。けれども復活のキリストに捉えられて、目がさめました。このように読んでまいりまして、すこしずつイエス様の最後の晩餐におけるお祈り。このあとすぐ捕えられて翌日には十字架にかけられる。弟子たちを裏切るけです。しかしそこに神様の御心に従って自らをわたしたちのために。このわたしのために奉げつくされたイエス様の姿があるわけです。このような次第でありましてようやくヨハネ伝 1 7 章におけるイエス様のお祈りにこめられた主のときめきが少しばかり見えてきたように思います。要はイエス様を信じ、信じるなら従うかどうか、教会は他者のために生き、死ぬ時にのみ教会は教会である。その言葉も覚えながら。そして正にイエス様の遺言とも言うべきこのほりわりを私たちは日々文字通り反芻しつつ、このイエス様のお祈りが、わたしにおいて、わたしたちの教会において、本当に実現されていくことを願いながら、そして本当にイエス様のお祈りにありますようにすべての人が、すべての国が本当に一つとなる。そのことを祈りもとめつつ、歩んでまいりたいと思います。

お祈りいたします

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様

あなたが御自身のすべてをわたしたちのために捧げ尽くしてください。その御愛をもって、御憐みをもってわたしたちをいま、この後もとこしえに、かえりみてくださいますことを覚えて、感謝いたします。どうかあなたがお遣わくださった主イエス・キリストを信じ、その教えと祈りに聞き従って歩むわたしたち、わたし

たちの教会であらしめてください。

この祈りイエス様の御名を通しみ前にお捧げいたします。

アーメン